

忘れない…東日本大震災から1年 私たちができる復興支援

東日本大震災からもうすぐ1年。現在は金銭や物資のみでなく、“人の絆やつながり”など、心の長い支援が求められています。そんな中、最近では被災地から移住してくる母子が徐々に増加中。今、私たちが身近でできる支援は何でしょうか。県内の女性グループなどの取り組みを通して考えます。



県内外から多くの親子連れらが参加

倉敷市東町の「倉敷町家トラスト事務所」では、1月末に、東日本大震災支援の「第2回みちのくカフェ」が開かれました。カフェでは、東北地方の特産品「ずんだもち」や東北地方の新聞、避難所の女性の手作りブローチの販売、写真展も行われました。親子で訪れた橋村尚子さん(倉敷市阿知)と友人の片山有美さん(大阪府岸和田市)は、「東北地方を身近に感じられた。大震災を忘れず子どもに伝えていきたい」と話していました。

企画するDream-style(ドリスト)は、この他にも月に一度、県内避難者たちの集まり「ドリストカフェ」を同市内で開催。13組前後の避難親子らが集い、情報交換や子育ての悩みを話す場となっています。代表の高橋香さんは、「私も含め、慣れない岡山での生活に戸惑う人も多く、皆の笑顔が見られてほっとします。多くの方に参加してほしい」と話します。震災後、現地調査や研究、シンポジウム開催、情報発信などをする協議体「DONATION(どねーしょん)くらしき(中村泰典代表)」もドリストに協力しています。



高橋香さん

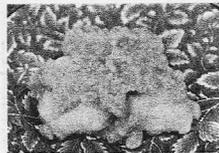
■みちのくカフェ
開催場所/倉敷市東町1-21NPO法人倉敷町家トラスト事務所
開催日時/毎月第4土曜日12:00~18:00
問い合わせ/TEL080-4552-3967(高橋さん)
★ドリストカフェ
月に一度、倉敷市内で開催。開催場所や時間は要問い合わせ
(TEL080-4552-3967高橋さん)。

カフェで情報交換・発信

「みちのくカフェ」



地元倉敷の人たちが東北地方の特産のずんだもちを手作り

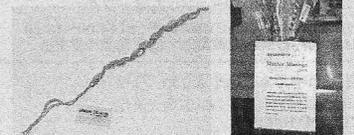


今すぐできる!復興支援

1 復興支援グッズの購入

基金や義援金、基金付商品の購入などのほか、被災地の人が手作りした復興支援グッズの購入が注目されています。これらは被災地の人たちにとって仲間同士で作る(働く)こと、買ってもらうという二重の喜びがあり、自立を後押しすると言われています。地域のバザーなどで、委託販売をするのもおすすめです。

復興支援グッズ1 漁網を使った手作り品 マザーミサंगा



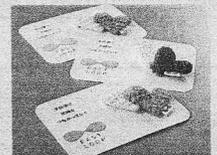
被害の大きかった宮城県石巻市雄勝町の女性が、漁網を使ってカラフルに手編みしたものを、切れると願いが叶うとされるミサंगाとは違い、「切れない絆」が特長です。1つ1000円で、全額が制作者の収入に。「焼きたてパン工房ラッセン」(岡山市北区伊島北町/TEL086-214-3445)やAMDAで販売。

復興支援グッズ2 東日本震災追悼「くらやみキャンドル」 3・11の闇夜を思う



「3・11」の震災1年の日に、キャンドルを開んで祈ろうというキャンペーン。1つ(2個入り)200円。NPO法人遠野まごころネット「まごころサタ基金」を通じて収益の全額を被災地の子どもたちに。販売は倉敷市役所売店など。連絡先はTEL080-6309-6624(プロジェクト実行委員会事務局坂ノ上さん) okayama@coco-on.jp

復興支援グッズ3 手編みのハートがかわいい EAST LOOP「ハートブローチ」



岩手県の陸前高田市・釜石市・大船町などの被災者が手編みしたかわいいニットブローチ。商品代金の半額が制作者の収入に。5色、840円。「みちのくカフェ」で販売。(株)福市 TEL06-6648-8080 <http://www.east-loop.jp/>

避難母子との輪を広げる 「岡山子育て応援団パピママ」



メッセージ入り布で作った袋(1m×1m)は、約10個にも。「きっと笑顔になってくれるはず」と「パピママサタ」の贈り物に思いを託します

幅1.5m、長さ20mの大きな布いっばいに描かれた子どもたちの絵や「がんばって!」などのメッセージ。子育てグループ「岡山子育て応援団パピママ」では、震災1年を迎えて、被災地の児童養護施設などに、子育てグッズをこの布で作った大きな袋に入れて届けることにしています。

運営者で子育て中の石川智美さんは、樋口由香さん、西川敬子さんと活動を始め、これまで定期的に母子が参加で

■岡山子育て応援団パピママ
岡山市南区浜野 問い合わせTEL090-9411-1899(石川さん)
<http://papiyama.com/>



きるイベントを開いてきましたが、昨年の震災直後に県内避難者親子を積極的にグループに招き入れ、イベントへの招待や生活用品、子育てグッズの提供を呼びかける活動も行ってきました。今ではメンバーの3分の1近くが被災地からの親子になり、友情の輪が広がっています。「避難先の岡山で、子育ての悩みを分かち合う友だちづくりは不可欠。長い付き合いをしたい」と三人は笑顔で話します。



左から樋口由香さん、石川智美さん、西川敬子さん

「忘れない」気持ちが、復興を後押し

AMDA(アマダ)は、現在も被災地などを毎月訪れ、復興支援活動を続けています。現地で今、求められているのは、「忘れない」という思い。心と心のつながりが真の復興を支えるので、一人ひとりの思いや力が必要なのです。一方で、「支援される側にもプライドがある」と代表の菅波茂

は言います。被災者の皆さんに、笑顔で接することを心掛け、思いやりや感謝の気持ちを学んでいます。お互いさまの気持ちを忘れず、被災者の方々と思いをつないでください。今、被災地では、週末中心にさまざまな行事が行われています。被災地の今を、ぜひ見に来てください。



AMDA プロジェクトオフィサー 大政朋子さん

■特定非営利活動法人AMDA(アマダ)
国際医療NGO。震災翌日から被災地で緊急医療支援を実施。復興支援活動として、被災地の医療機関支援や教育支援など、さまざまな活動を行っている。

★AMDAの活動は、民間の支援が支えます。AMDAへの寄付金の受け付けはホームページを参照。
岡山市北区伊福町3-31-1 TEL086-252-7700
<http://www.amda.or.jp>